

論文審査の要旨及び担当者

論文題名

秦始皇帝像の歴史の変遷—史学史的考察—

論文審査の要旨

中国を最初に統一した始皇帝（在位前 247~210）に関しては、多くの研究蓄積があるが、本論は後世の始皇帝像がどのように歴史的に変遷してきたのかを丹念に考察したものである。始皇帝研究の課題は前 3 世紀の皇帝の実像を探るものではあるが、ここでは始皇帝後の評価を始皇帝像として探り、その歴史的变化をたどることを主眼に置いた。こうした方向の考察は、後世の脚色をできるだけ払拭しようとする正統な歴史学から見れば、意味のないもののようにも思われるが、実はそうではないことを知らされる。最初に統一を実現しただけに、始皇帝ほど後世いろいろな立場で様々に議論された帝王はいない。その後世の議論こそ、中国における伝統的な歴史学そのものであったことを考えると、歴史の変遷を整理することは、始皇帝の実像を探るためにも重要な作業となる。これまで重要な基本史料とされてきた司馬遷（前 145~86 頃）の『史記』そのものも、始皇帝後の前漢代（前 202~後 8）の一つの始皇帝像を語るものである。そして『史記』という重要なテキストは、さらに千年後の宋の時代（960~1279）になってようやく印刷本として普及し、当時の知識人階層の士大夫たちが史学（司馬光『資治通鑑』、欧陽脩『新唐書』）や金石学（石刻碑文や青銅器など解釈する学問。欧陽脩『集古録跋尾』、趙明誠『金石録』）という学問を構築しながら始皇帝を論議することができるようになった。本研究は従来の始皇帝研究にとっても大変重要な作業といえる。今のために始皇帝を語るという時代的制約の強いプロパガンダ的議論もきっちり整理して分けながら、副題にあるように史学史的考察に力点を置くことにより、学術的に価値ある研究になっている。

本論は二部構成であり、第一部「秦始皇帝像研究」では歴代の秦始皇帝像の変遷を扱い、第二部「北宋政治思想研究」ではとくに始皇帝像の転換点として重要であった北宋の時代（960~1127）の政治思想に焦点を当てている。始皇帝の死後、現代に至る 2 千年の間に、始皇帝像には千年に 1 回の大きな変化があり、都合 3 回変化（前 1 世紀前漢代、10 世紀北宋代、20 世紀近現代）を遂げたという。有能な君主や英雄としての評価の一方で暴君として否定的に評価された。この極端に揺れ動く始皇帝像は、個人の立場を超えたそれぞれの時代が生み出したものであると見る。

第一部では、歴代の始皇帝像の変容をまず概観し（第一章）、唐・五代時期（第二章）、宋（第

三章)、日本の明治維新时期(第四章)、近代中国(第五章)に分けて考察した。まず唐代(618~907)の始皇帝評価は、皇帝への上奏文書という公文書のなかに表れており、政治に深く関わるものであったと指摘する。また皇帝の行動を諫めるために、詩が活用されたのもこの時代の特徴である。唐詩も個人の文学的創作であるとともに、過去の始皇帝に借りて、同時代の唐の皇帝の行動を諫めるものであった。晩唐の詩人として知られる杜牧(803~853)が「阿房宮賦」を謳ったのは、同時代の唐の敬宗(在位 824~826)の土木工事への批判であった。また中唐の詩人李賀(791~817)の「秦王飲酒」も、内容は過去の秦の事績とは関係なく、目の唐の徳宗(在位 779~804)の生活を風刺的に描いたものであった。このような指摘は個々の唐詩の解釈で行われてきたことではあるが、始皇帝像の歴史的な変遷史のなかで見直した点が新しく、唐代の始皇帝像の特徴が明らかになる。論者は唐代の始皇帝像にはまだ伝説的な要素が強いことを指摘した。

北宋の時代は、木版印刷術の普及によって始皇帝の基本テキストである『史記』も安価で入手しやすくなり、史学の研究にも大きな影響を与えた。宋の皇帝は臣下と『史記』を読み、討論したという。そのなかで『史記』の学が生まれ、民間の俗説などは排除されていった。同時に『史記』のテキストに懐疑的な見方がされ、欧陽脩(1007~1072)の『集古録跋尾』や趙明誠の『金石録』に代表される金石学の成果では、碑文や文物の銘文から始皇帝の既存のテキストを批判する研究が始まった。欧陽脩は始皇帝の刻石である泰山刻石や嶧山刻石の拓本や原石の照合を行っている。宋代では史学が経学に匹敵するほどの学問として発達していった。金石学者の創始者の欧陽脩は正史『新唐書』の編者でもあった。士大夫たちは、過去の王朝の正統性への関心から、古物をたんに趣味として好むのではなく、金石学という学問を成立させ、始皇帝に関わる刻石の拓本や原石への関心を学問的に高めていった。こうした知識人の共有する学問を、論者は個人を超えた解釈的共同体と称している。

北宋の時代には、儒教的教養を持ち科挙試験に合格した社会的支配者層の士大夫が皇帝の下で王朝政治を主導していった。東アジア世界の冊封体制の中心に位置した唐帝国が崩壊した後、宋王朝は北方民族王朝の遼、金、元などの圧迫を受け、華夷関係が逆転する時代に入ってしまった。そのなかで過去の北方民族の王朝を正統王朝から排除する正統論の議論が活発に行われた。始皇帝が批判され、逆に北方の遼王朝の側では秦漢の王朝を評価し、始皇帝を取り込んでいった。北宋3代皇帝の真宗(在位 997~1022)は、1004年遼の聖宗と澶淵の盟を結び、兄の宋が弟の遼に歳賜を贈るなど華夷関係は大きく揺らいだ。真宗が泰山の封禅を実施したのも、不利な対外関係を意識して行われたものであった。対遼の宣伝戦略として始皇帝を批判し、秦王朝の正統性を徹底的に否定するようになった。

真宗の勅命で編纂された類書(百科事典)の『冊府元龜』では歴代の帝王の評価が行われ、閏位(正統でない王朝)のなかに秦、蜀漢、孫呉、南朝の諸王朝が並べられた。同じ類書の『太平御覽』では、遼朝を立てた北方民族契丹は始皇帝が長城建設などに徴発した刑徒の子孫であるとしている。北宋の蘇洵(1009~1066)は、秦よりも秦に滅ぼされた東方六国に同情し、子の蘇軾・蘇轍にもその立場は継承されている。論者が丹念にまとめた類書に引用された『史記』秦始皇本紀の引用文の一覧は、『史記』のテキスト学としても有益な作業である。

近代に入り、始皇帝は英雄として評価されるようになり、旧来の始皇帝像は大きく転換した。それは日本の明治維新期の始皇帝像が中国にも波及したといったためであると主張する。東洋史家桑原隲蔵の「秦始皇帝」（1907年）が始皇帝を評価したことをはじめとして、江戸の漢学者にまでさかのぼって始皇帝論を検証する。こうした日本の影響で中国でも英雄待望論のなかで始皇帝が注目されていく。章炳麟（1869～1936）や郭沫若（1892～1978）らは日本に留学する機会に日本における始皇帝評価の思潮を受け入れた。歴史家郭沫若の『十批判書』（1945）では、儒家と並んで始皇帝も批判の対象であったが、毛沢東は1973～76年の批林批孔運動のなかで郭沫若を批判し、始皇帝を儒法闘争史観のなかで儒家に対する法家の代表として評価した。江戸・明治以来の日本での議論と近現代中国での始皇帝評価を関連させ、英雄待望論として一時代の始皇帝像をまとめたのは独創的な見方である。

第二部「北宋政治思想史研究」では、第一部の宋代部分をさらに深めて論じている。宋王朝が掲げた統一の論理（第六章）、宋真宗皇帝の泰山封禪の国家儀礼（第七章）、金石学の成立（第八章）、金石学と国家儀礼（第九章）について考察する。北宋は唐以来の統一を実現するが、北方民族国家が五代の時期に獲得していた燕雲十六州を奪還できず、北方民族を服属させることなく、劣勢の立場での統一であった。そもそも『春秋公羊伝』の大一統という考え方は、領土の統一ではなく、中華の中心の周王の暦の下に諸侯が包摂されることであった。中華北方遊牧民契丹の遼（916～1125）の存在を認めながら、宋は王朝としての正統性を自己主張をしていった。真宗の泰山封禪についてはよく知られている事実であるが、対遼の外交戦略として内側の領土意識を強固にするための祭祀であったこと、またそのために始皇帝の泰山刻石などの金石史料にも注目したことなどの指摘は従来注目されてこなかった斬新なものである。

欧陽脩の『集古録跋尾』の中身をさらに詳論し、とくに始皇帝の泰山刻石の文章の意味を取り上げている。欧陽脩は刻石の現地での残存の状況や拓本の真偽についてふれ、文献史料にとらわれず、刻石の拓本と比較しながら研究をする姿勢を探っている。宋代には119種もの金石学の書籍が出され、学問として継承されていった。とくに南宋の鄭樵（1104～1162）の『通志』では、金石を史学の史料として用いるべきという主張をしたが、当初は異端として扱われ、清の章学誠によって評価されるようになったという。北宋の徽宗（1082～1135）の勅命で編纂された『宣和博古図』では、皇帝自身が青銅器を所有し、士大夫よりも皇帝が金石学を主導したものと見ている。従来、金石学の成果は、とくに西周史の金文史料として活用されてきたが、本論のように中国の政治史や史学史の流れのなかで位置づけられることはなかった。論者が始皇帝像の変遷という視点から金石学を見直したことが成功したのであろう。

本論文では以上述べてきたように、始皇帝後の始皇帝像の歴史的変遷を通時的に整理した研究は従来見当たらず、独創的なものであり、高く評価できる。なかでも史記学（普及した版本のテキストによる『史記』の解釈学）、史学（過去の歴代の王朝の正統論を経学とは独立して学問として構築した学問）、金石学（文献以外の石碑・青銅器などモノを史料として扱う学問）という三つの学問が宋の時代に結実し、その成果のなかで高いレベルの始皇帝像が形成されていったことをはじめてつきとめたことは、本論文の最大の成果といえる。発想の斬新性、緻密な史料分析力など、従来の始皇帝研究に大きな寄与をするものである。また本論の第七章の宋

真宗の秦漢時代観の部分は、中国の宋代政治史研究新視野国際中青年学者論壇の学会でも報告し、中国の宋代史研究者のなかでも高い評価を得、若手研究者としても注目されている。

以上、本論文が十分博士論文としての水準に達していることが認められた。

論文審査主査	鶴間和幸	教授
	武内房司	教授
	王瑞来	非常勤講師